Hokuriku University

ドイツ文学における「人間」観の変革（2）

―― ルイーゼ・オットー・ペータースの場合

田　村　光　彰

Die Veränderung des Beriffs des "Menschen" in der deutschen Literatur (2)

— Im Fall von Luise Otto-Peters

Mitsuaki Tamura

序　章　ルイーゼ・オットー・ペータース
第一章　「人間」観の変革をめざして
　1　18世紀までの「人間」観
　　①　ルソー，ゲーテ，シラーの「人間」観
　　②　古典主義の「人間」観へのプロテスト
　　③　古典主義までの「人間」観と自立の思想の歩み
　2　両性に平等の文学研究を
（以上先号）
第二章　ルイーゼ・オットー・ペータースの作品
　『女性の国政参加』
　1　はじめに
　2　作品の概観
　3　作品の検討
　　①　政　治
　　②　宗　教
　　③　女性の文学の受容
　　④　ルイーゼ・アストンとルイーゼ・オットー・ペータース
　　⑤　教育への提案　(1)上流階級へ
　　⑥　教育への提案　(2)下層階級へ
　4　おわりに ―― 「人間」観の変革
（以上本号）

第二章　ルイーゼ・オットー・ペータースの作品『女性の国政参加』

1　はじめに

序章でふれたように，1843年秋，『ザクセン祖国新聞』はローベルト・ブルーム Robert Blum による記事「女性の国政参加」を掲載した。ここにはルイーゼ・オットー・ペータース Luise

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

Otto－Peters にとって，「今だ言われたことのなかった衝撃的なテーマが表現されていた。」[1] 3年前の感動をもとに，1846年，同じタイトルでルイーゼ・オットー・ペータースによる『女性の国政参加』が出版された。

この論文は，序文，第一章，第二章，あとがきの四部から成立している。序文では第一に，彼女がブルームの筆になる記事を読んだときの心の躍動と，これを公けに発表することがいかに困難かが述べられている。「親しい仲間たちの間でもついぞ口に出す勇気がなかったもの」[2]をこれから書こうと決心する。第二に，女性だけが国政参加を妨げられているのは「人倫に反し」unsittlich,[3]「自然に反している」[4]。ところで，時代は下って，1918年，ようやく実現した女性の参政権は，国家社会主義によってさげすまれる。ナチスによれば，女性は国家の主体を構成する役割をもつべきものではなく，国家に奉仕する子を産む機能におとしめられた。『国家社会主義入門』は女性の務めを次のように規定した。「ドイツの婦人たちは，第一に妻であり，母たることを望んでいる。（略）彼女たちには，工場への，事務所への憧れはないし，議会への欲望もない。和やかな家庭，愛する夫，そしてたくさんの幸せな子供たちが彼女たちの心のそばにいる。」[5] こうした男性＝議会，女性＝家庭という性別役割分担は，ルイーゼにとって人倫に背き，人間性に反するものであった。第三に，この序文には彼女が当時『ザクセン祖国新聞』に書いていた他の記事に対する女性読者からの反響が記されている。「書くことに躊躇していた他の女性たちは，私に手紙をくれた。このようにして，私は自分の見解が他の女性たちとは私が思っていたほどは決してかけ離れていないことを知った。」[6] こうした読者からの共感にも基づいて，この論文は成立したものと思われる。女性の国政参加が義務であるとの主張をふまえて，第四にこの主張を具体的に行為に移さなければならないと訴える。「今やこの主張を確認することが大切なのではなく，これにただ生命の息吹を与えること，これを実現することが問われているのだ」[7]

2 作品の概観

各章の検討に入る前に二つの章の概観をしておこう。第一章は内容から判断して二つの部分に分けられる。初めの部分では，近年増加してきた女性の政治参加の実例が述べられている。世間も女性たちから政治参加への機会を以前よりは奪わなくなっている。そして女性たちもすすんでそれを逃さなくなってきた。例えば，女性がザクセン邦において「議会の審議を傍聴している」[7]事実。女性同盟が多数創られ，「カトリックを支援している」[8]という指摘。シュレースヴィヒ，ホルシュタイン両公国の帰属をめぐる独立運動にむけて，バーデン邦の女性たちが寄せた署名。ライプツィヒやザクセン邦の議員集会，政治的祭典への女性たちの出席。女性作家たちが宗教や社会問題を叙述の対象にしている事実。これらは数年前までは全く生じない現象であった。何故か。後半の部分はこれに解答を与える構成となっている。その理由は，ナポレオンに対する闘いの中では確かに目覚めていたドイツの自由な精神が，その後眠り込んでしまったが，今やはっきりと「墓場から蘇って」[9]きたからである。「花期を告げる聖なる春の息吹きはドイツの国中をおおう」[10]ようになったからである。ここには三月革命前の自由の発展が詩的に語られている。では何が，男性の，ではなく，女性の「自由な精神」を目覚めさせたのか。彼女によれば，それは第一に，ヘルヴェーグ，フライリヒラートらの政治詩であり，第二にはシュレージェン地方に広がったドイツ・カトリック内の改革運動である。第三は時事問題を扱

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

う小説を女性たちが書き，社会問題にふれる作品が女性の手で創られたきたことである。

第二章は三つの部分から成立している。その第一は，今や時代が力強く叫ぶようになり，新しい生命が女性をも活動的な領域へと誘ってはいるが，依然として旧態然たる状況が社会の隅々までをおおっている現実にふれる。すなわち，ドイツの女性たちは四六時中両親の監督下にあり，両親の考えとは別の考えをもとうとはせず，両親の言葉をくり返す。嫁いでは夫の言葉をそのままに言うオームになってしまっている。こうした没個性，非自立性をうみだす元兇は何か。第二に，この原因が貧困な女子教育にあると彼女は考える。小手先の技術や知識のつめ込みを目標とするのではなく，もっとより普遍的なものを教え，思考を養うことだという。ゲレールト，ゲーテ，シラーが嫌った理性〔紀要先号参照〕をもった人間として育てるよう訴える。こうした教育方針に則って，第三に具体的な案を提出している。その第一は世界史を特に教えること，第二に私塾や日曜学校の設立，第三に上流階級の娘たちだけではなく，下層階級の娘たちにも教育を与えるべきである，と。

あとがきでは「自由を求める者はすべて互いを高めあい，互いを発展させなければならない」[11]がゆえに，一方の性が他方の性の自由な発展を押えている現実は変えていかなければならない，と論文をしめくくっている。

3　作品の検討

二つの章の全体を概観し終えたところで，次に各章を詳細に検討してみよう。

①　政　治

第一章では，初めに政治詩 die politische Poesie による時代精神の覚醒，女性の時事問題への関心の喚起に感謝して，彼女は次のように書いている。「ありがとう，あなた方，詩人たち。あなた方は民衆が眠りから醒めるように歌おうとした。その歌声によって，現実に女たちは眠りからさめている！」[12]更に授業の教材にふれる。政治が新聞に載ってくるとむずかしく，女性にはわからない。詩の翼に乗ってくる政治ならば理解しやすい。地理が紀行文学をテキストにとりあげることによって「学校の，退屈な授業」[13]に陥入ることを避けているように，政治は詩を通して学校教育の場でもとりあげるべきであるという。紀要先号〔9頁〕で言及したように，フックス，ルソー，ゲーテ，シラーのような巨匠たちが作りあげ，規範化してきた男＝理性，女＝感情という図式がまかり通り，人間＝男性という意識的，無意識的通念が堅固にそびえたつのは，政治への無関心にも原因があるということになる。彼女は政治詩による役割分担の図式や社会通念への批判を主張し，理性への目ざめを説く。「子供の時から女性をか弱いものに，頼りないものに，おとなしいものにのみ育ててきた。（略）（女性は）感情の甘やかな発露よりも強いものをよしとする，真に女性の性質に目覚めている。」[14]

②　宗　教

次に彼女の賞讃は，19世紀に復興・隆盛期を迎えたドイツ・カトリックにむけられる。この「新しい宗教改革」[15]は神の前での司祭と平信徒，学者と一般の人，そして男性と女性の精神上の平等という合言葉を与えた。[16]彼女に依れば，従来の改革運動は重箱のスミをつつくような教義問答に終始し，結局は教会内の論争や改革に収斂してきた。これに対して，この改革運動

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

は教義を独占していた教会からの「宗教の解放」[17]であるという。女性の第一の特徴を「自由な心の欲求」[18]に従う性質であると考える彼女にとっては，宗教とはこれを助けるものでなければならない。これまでの教会は，こうした欲求を抑圧してきたととらえる彼女は，今まさに蘇生した宗教改革を通して，教会によってタガをはめられてきた心と感情の解放を得ようとする。ザクセンの説教壇から呼びかけたヨハネス・ロンゲ神父の言葉を彼女は引用している。「宗教改革の精神は目覚めた。祖国ドイツのすみずみにまでみずみずしく蘇った。老いたる者は今や突如青春の覇気に満ち溢れ，真理のために精神の刃を高くかざすことができるのは何故か。老いも若きも女性も目を見開き，国民の現状を凝視し，歴史の闘いに参加せよと呼びかけるのは何故か。彼女らもわれわれに歩みよりこう言った，『私たちもあなた方の活動に参加したい。私たちもあなた方に連帯したい！』ぜひそうしよう！女性もまた独自の方法で，この聖なる活動に共に建設の手をかすべきである。退いてはならない。民衆と祖国と神聖な人権を守ることが大切なこの今！」[19]

③ 女性の文学の受容

続く部分はルイーゼ・オットー・ペータースが同時代の女性文学者をいかにとらえていたかを示している。政治詩，宗教をとりあげてきた彼女は再び文学をテーマにする。端緒は，小説を書くことが彼女たちにとってはむずかしいことではない，という主張である。理由は，小説を書く上で，最も重要な条件を女性は古来より求めてきたからであるという。条件とは(1)人間をよく知っていること(2)人間の心の奥底にある知られていない部分を知っていることである。次の主張は，二年前まではベッティーナの Königsbuch が唯一の例外で，他は時事問題に無関心な女性の作品がほとんどであり，こうした作品は結婚をしている女性の立場のみを問題にしていたという。「時事問題に関心をもつということは自分たちの価値が下ってしまう」[20]と思いこんでいるようであると。

だが，二年後の1846年現在，イーダ・フォン・デューリングスフェルト Ida von Düringsfeld が「我が教会の歌」等によって改革運動への参加を示し，フラウ・フォン・バッハラッハト Frau von Bacheracht は『ハインリヒ・ブルクハルト』の中に社会的な問題をとり入れた。『女性の隷属と自由』でイーダ・フリック Ida Frick は女性の教育と教養がこれまでなおざりにされてきた事実を指摘している。ドイツカトリック婦人同盟の代表者は，雑誌『改革』を出版し，女性と新しい宗教運動の立場から社会問題をとりあげた。

これらに続けて彼女がとりあげるのは，1845年に娘一人を連れて，夫と別れてベルリンに移り，後にプロイセン邦にとって危険人物であるとしてベルリンを追われたルイーゼ・アストン Louise Aston である。彼女は(1)男性の協会を訪れたこと(2)婦人解放をめざすサークルを創ったこと(3)神を信じなかったこと(4)ゴットシャルの詩，『マドンナとマグダレーナ』が彼女に捧げられたこと等を理由として，首都ベルリンでの滞在許可証の延長が認められなかった。ルイーゼ・オットー・ペータースは，自分がアストンと「同じ目的をめざしている」[21]女性であるとみなされたくはないので，首都ベルリンを追放されたこの女性について何らかの説明をせざるをえないと前置きして，以下の論評を行っている。第一に，確かに彼女の行動に同情はする。というのも，その行動はドイツの女性たちにのしかかっている抑圧に原因があるからである。だが，第二に，アストンは「ドイツの女性たちが求めている地位向上への努力の敵対者」[22]である，と。こうした判断の根拠は何か。その一つを，偶然の事情でアストン家の家庭の様子を熟知してい

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

たエルンスト・ライル Ernst Reil の書いた『ラテルネ』から引用し，三点にわけて掲げている。これによれば(1)アストンは並みの教育しか受けていない。(2)誤った概念の使い方。これによって「眉態をふりまき，もてはやされながら，なるほど彼女の同志たちは確かにひきつけることが可能かもしれないが，理性〔傍点田村〕をもった男性を決して魅了しはしない。[23]」(3)アストンは人々の話題は何でも利用してしまう。例えば，宗教とは何か，信仰とは何かを全く知らずに，宗教が社会問題となるやいなや自己の解放の論理のなかにこれをとり入れている。「ぬけめなく[24]」彼女は自分を無神論者に仕たてあげてしまった。第二の根拠は，アストンの詩集『野バラ』について論評した『ハンブルグ四季』からの引用の中に，2点にわたって示されている。(1)この作品には「真の詩人[25]」の心が宿り，長所は，「美しい言葉，激しい愛，勇気と覇気，熱き空想[26]」である。(2)短所は，「女性らしさが微塵も感じられ[27]」ず，「うんざりするほどいや気を催す流行の語句を用い，人に媚をうる異常な欲望が目につく[28]」作品であるという。したがって，彼女の作品には不満なので「手にとるのはやめよう[29]」と。「真の詩人」の心の宿る詩を「手にとるのはやめよう」とは矛盾した評論だ。また，女性らしさは全くないが，「真の詩人」――これも奇妙な評価である。

ともあれ，ルイーゼ・オットー・ペータースはこの二つの引用をもとに，自分とアストンとの異なりを主張している。人間すべてがその時代の歴史的制約性の中で生きている以上，アストンといえども男性の視点，男性の眼で社会化されてきた事実を改めて指摘せざるをえない。

④　ルイーゼ・アストンとルイーゼ・オットー・ペータース

ここで簡単にアストンの行為を明らかにしておこう。アストンは1830年代に，自分の夫である工場主に雇われていた無数の第四階級の生を凝視し，「福祉をどんなに拡大しても過酷な社会的対立を緩和することはできず，自由な正しい社会秩序は闘いとらねばならない[30]」と考える。彼女は同時代の，ハイネやグッコウら三月前期の男性作家たちが直視した第四階級の救済と，彼らが軽視した女性の自立という双方の課題を追求する。自由な物の見方と強い意志による個性の確立，より高い教育と学問への情熱を満たし，これを職業にいかすためにベルリンへ移る。紀要先号で述べたように，男性＝合理，理性，職業，女性＝感情，感性，家庭が規範となり，人間とは男性でしかなかった当時にあっては，こうした生き方は「女性らしく」なかった。

ベルリンでの滞在許可証が1846年12月2日で切れることになったアストンは，延長願いを申し込む。当局はこれを拒否した。その理由は，彼女を非難する多くの手紙が国王のもとに届いたからだという。その内容はすでに述べたように，男性の会の訪問，女性解放サークルの創設，無神論者，ゴットシャルの詩の彼女への献呈であった。手紙で彼女は反論した。「思想・信条は個人の財産と同じで，誰もこれを犯してはならないのです。匿名の手紙は私に反対する特定の人から来たものです。私の文学活動，とりわけまもなく出版される私の詩集『野バラ』のためにここに滞在することが是非とも必要です。[31]」翌1847年2月，彼女は当局の呼びだしをうける。担当の参事官が彼女を別室で待たせている間に，部下の係官との対話が知らないうちに調書として記録されていた。3月21日，一通の命令書が届く。「ベルリンを8日以内に立ち去るように。理由は市民の安寧と秩序を危険に陥入れる思想をうみ，表現しようとしたからである。[32]」彼女は首相あてに丁重な手紙をかき，次の点を訴えた。(1)詩集『野バラ』が出版されるベルリ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ンに滞在できることは，娘と自分の境遇に良い影響を与える。(2)調書は全く私的な会話であり，公けの審問ではない。(3)プロイセン邦での良心の自由，思想信条の自由が男子臣民のみに許されていて，女性の場合には同じことを行っても「市民の安寧と秩序」を犯すと判断されることは不思議である。(4)献詩『マドンナとマグダレーナ』の内容と自分の思想とは別である(5)匿名の手紙の出所があいまいである。

3月24日，内務大臣から一片の手紙が届く。当局の処置は正しく，この件は打ち切りにする，という内容であった。これで諦めず，内務大臣との面会を申し込む。彼女は，対話をした大臣の言葉の中に，上に述べた追放の理由とは異なる別の理由もあることを知る。

大臣：「あなたが誘惑されないように，小さな場所があなたに与えられねばならないのです。あなたの魂の救済に配慮がいくように。」

アストン：「しかし私が文学で成功するためには，常に新しい刺激が得られるベルリンに滞在することが必要なのです。

大臣：「あなたが考えているように，自由に将来もここで作品を書いていけるかどうかなどということに，私たちは全く関心がない」[33]

彼女はここに，自分が「市民の安寧と秩序」を乱す者，すなわち，市民に対する加害者であるという断定とは正反対に，男性ジャーナリストや男性学者たちから誘惑されないように保護される対象，つまり，被害者であるという見解を見いだした。時代の思想や運動が彼女を誘いださないように配慮し，隔離してやるという措置の中には，保護する国家と保護される臣民という図式があった。と同時に，男性学者や男性ジャーナリストに誘惑され，「女性らしさ」を失わないように，保護し，後見する，すなわち，配慮する男性と配慮される女性という関係に彼女は気づき，これが自分の自立を妨げる壁となっていることを知る。

当局，内務大臣に拒絶されたアストンは更に最終審として国王に直訴状を書く。ベルリン滞在が自分の職業と教養の獲得に有利であること，また，生計を維持できるだけの収入を示せれば，プロイセンにはいかなる臣民も滞在をし，居住できるという1843年の法を楯に滞在延長を訴えた。これも拒否された。そこで「プロイセンのすべての機関に訴えた今，私はもう一つより高い機関に自分を委ねるよう，すなわち，最終審としてこの身をドイツ国民にゆだねよう。」[34]

ここでルイーゼ・オットー・ペータースのアストン評にもどろう。第一の「並みの教育しか受けていない」という批判は，ようやく作品を書き始め，書くという職業に就くことによって自立しようと苦難の道を歩んでいた女性作家たちに，男性から浴びせられた批判である。先号でふれたように（ルソー・シラーの「人間」観 p. 63），芸術活動とは学問を積んだ後で初めて行うべしという規範の下で，多くの女性作家たちがペンを捨てざるをえなかった。能力ゆえにではなく，性別ゆえに男性と対等な教育を受けることを許されなかった女性たちは，作品の質と内容で評価されるのではなく，まず初めに，教育の有無が規準であった。ルイーゼ・オットー・ペータースの先の批判は男性の側からの門前払いそのものである。第二の彼女の批判は，理性をもった男性をひきつけられないとなっている。だが，理性をもった男性こそが，女性＝家庭，感性，男性＝職業，理性という図式を拡大再生産していた。この批判も，先号で考察したように，男性側からの視点でしかない。第三は宗教とは何かをよく知らずに，自らを無神論者にしたてたという。この批判は，ルイーゼ・オットー・ペータースがカトリックの復興運動を評価するのに対して，アストンが無神論を信じていたという世評の対照に起因すると思われる。福

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

祉の拡大によっては過酷な社会的対立の緩和は不可能であり，闘いによって新しい社会は創りだされねばならないと主張していたアストンは，先述したようにプロイセンの検閲制度によってベルリンを追放になった。ハイネらの男性であっても，追放は一大センセーションをひきおこしたのに，本来家に閉じ込もっているべき女性であれば，なおさらであった。国王に届いたとされた無神論者という投書は，実際に神を信じなかったかどうかは別として，人非人という意味である。ルイーゼ・オットー・ペータースがこうした世間の評に乗って，無神論者批判を行うことは軽卒と言わざるをえない。

⑤　教育への提案(1) ── 上流階級へ

第二章は，国家と社会が女子教育を無視しつづけている事実の指摘で始まる。1815年，対ナポレオン戦争に女性は参加したのに，その後，現実の問題へのとり組みが許されなくなってしまった。「時代が力強く叫び[35]」，「ドイツの女性たちが以前にも増して，公けの，国家的な，政治的な事柄への関心を示している[36]」とき，1815年以後と同じようにこの関心が押えつけられないようにしなくてはならない。それには女子教育を変えていかなければならないという。

では，現実の女子教育の問題点は何か。第一に教育年限である。「知力がようやく花開き始め[37]」，「やっと学問的関心にひかれ始める[38]」15才以降は教育はなされていない。女子教育が14才まででストップし，これで完了してしまっている現状では，深い知識も，「盲従しなくてもいい判断力[39]」もつかなくなってしまう。

第二に，社会が女子に与える教育内容の貧困が述べられている。自立化を促さない教育の原因は，まず第一に女子教育をダンス，フランス語，英語そしてピアノに限定してしまっている現状にあるという。「自分の健康と無邪気すぎるほどの思慮分別をダンスの神々に捧げ，官能的な満足[40]」への誘惑，母国語の軽視かつ外国語の機械的な暗誦，受動・非個性的な巧みさを指に覚えこませるピアノ ── これらは精神を高め，祖国や人間への共感の喚起とはベクトルが異なるという。こうした彼女の批判は，ピアノもダンスも外国語も，外国人を意識したサロンのためのものであり，自己の啓発と精神性の高揚には役だたないという判断に基づいている。非自立化教育の原因の第二は，教育が「かいがいしく働く家庭の主婦になるためにのみ[41]」行われているのならばまだしも，現実はもっとひどく，男性たちの「添えもの[42]」に，「人形[43]」になるようになされている。社会で「相手に目立ち[44]」，「他人を冷ややかにけなし[45]」，「なま半可な知識」で「他人のうけうりをする[46]」ことが目標となっている教育からは，ささいなもの，とるに足らないものへの関心しかよびさまされず，「普遍的なもの，より高度なもの，全体的で総体的なものへの関心[47]」は奪われてしまう。思考をないがしろにした教育が，買い手を見つけるだけの「人形として生命を売る市場に送られる[48]」現実を疑問視しない人間に育てている。

ここから彼女の具体的な三つの提案が始まる。このうち初めの２つは上流階級に向けられ，他は下層階級の女子教育に言及している。初めの提案は世界史の教育である。それも，「ただ支配者，戦，年代を暗記するだけの，事実の死んだ寄せ集めとしての世界史ではない。個別と個別が内的必然性に基づいて関与しあっている生きた有機的総体[49]」として，また，民衆と国家双方の発展としての歴史を提言している。世界史に加えて，ドイツ史，現代史一般があってこそ，世界史の中に現われる精神が生き生きと生徒の前に姿を現わすのだという。

次の提案は教育環境の充実である。具体的には第一に私塾の設立を提唱している。彼女に依れ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ば，家庭と知，家事と学問は本来結びついているにもかかわらず，現実は男性が一方を，女性が他方を分担することが自然だと見なされている。今以上に知的向上を目ざす姿勢はすべての人間の義務であり，キリスト教の要求にも合致している，と。こうした理念で，私塾を設立すべきだという。かつて中小都市では，男子に対して共同で先生を雇って授業を受けさせた。同様に週三日でよいから娘たちを教育するべきである，と。ここでも教育の目標は，既成の知識の獲得ではなく，より高度なものへの関心と「自分で考え，自分で努力する」[50]契機をつかむことであるとされる。第二に，教員はドイツの女性たちから選ぶべきだという。フランス人やイギリス人よりも祖国愛にあふれたドイツの女性たちが好適である，と。同時に，世界史の他に自然科学と体操を加えることを主張している。第三に，これらに基づく教育施設は大都会ではなく，小都市や田舎に建てるべきであるという。「享楽と不道徳に満ちた大都会」[51]ではなく，それ以外の場で「しっかりとした知力，敬虔な感覚，ドイツ式の内面性と深い感情」[52]を身につけてほしい，と。社交婦人になるのではなく，１人だちをすることができる人間になるために。

⑥ 教育への提案(2) ── 下層階級へ

今まで述べてきた対象は上流階級であったのに比べ，提案の第三は下層階級をも含めている。含める理由は，第一に教養のある国民とは「市民階級と農民階級」[53]だけではない。すべての国民は対等な権利を持つべきであり，それには今まで悔蔑的な名称で呼ばれてきた人々，すなわち下階民 Pöbel を国民教育の対象にするべきである，と。第二にこれを怠ると，権利から除外されたプロレタリアートや下層民がブルジョアジーにとって代わる時代がやってくる。今まさに貴族を倒してブルジョアジーが登場してきたように。第一の理由にある平等観と第二の打倒される危機ゆえの下層民への教育の配慮 ── これは，この作品が書かれた三月前期でも教育によって人間が自立し，平等な権利を獲得できるのであるという彼女の視点を表わしている。ところで三月前期の下層民の生活はいかなる状態であったか。

ヨーロッパにおける「飢餓の30年代」のプロレタリアート，下層民の生活は悲惨を極めている。彼らは都市にも農村にも定住する権利はなく，自治体も保護の対象にしなかった。彼らは「過渡的かつ流動的存在として都市の生活秩序から排除されているだけでなく，農村の最下層の生活圏からすら閉め出されている。それはもはや奴婢ですらなく，あるいはまたしばしばアイリンガーなどといわれるような農村の日傭労動者ですらない。」[54]急速な資本主義化によって生じたプロレタリアートは，資本によって好景気のときは迎え入れられ，不景気の時は追いだされる景気調節の安全弁の役割を担わされた。不景気のときはプロレタリアの若年結婚の禁止が提案される。出生数の増大が社会のピラミッド型の支配構造を崩すという恐れから男30才，女24才まで結婚を制限すべきだという論がまかり通る。民衆の貧困化は，資本の原始的蓄積による収奪に原因があるにも拘わらず，逆に個々のプロレタリアートに責任が転化され，「定職のない『のらくら者』などは，南欧かアメリカかオーストラリアに送りだすか，少なくともこの連中に夫とか父などと呼ばれる資格を与えてはならぬ」[55]という論が大手を振るう。

さて，ルイーゼ・オットー・ペータースの下層階級への提案に戻ろう。資本の論理により，歴史的，社会的に市民社会から排除され，失業者となり，街頭にあふれ出ざるをえなかったプロレタリアート，下層民を，彼女は教育の対象に含めた。ところで，そのプロレタリアート観は，「ブルジョア社会の墓掘人」としてでもなく，社会変革の担い手でもなかった。彼女にとっ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

て，彼らは「諸階級の中の怠惰な汚点 der faule Fleck」であった。私は時代に先んじて彼らへの教育を主張した先見性と共に，ここに彼女の限界もまた存在すると考える。彼女の説く下層階級の子女たちへの具体的提案とは何か。第一に，人生の危機に対処するために確固とした道徳の支えと，第二に，パンを手に入れるための「器用さと知識」[66]を与えるべきだという。これらが欠けると，自分と同様に貧しい男性と結婚し，子供を育てる必要から，道徳的に悲惨におち込んでいく。そしてまともな知が欠落すると，悲惨から身を守れず，恥辱の極に身を落とすという。彼女は，今まで力説してきた高度なもの，普遍的なもの，全体的でより総体的なものは下層民の娘たちには望んでいない。道徳によって恥辱から身を守り，最低限食べていけるだけの知 ── 前者は売春の防止であり，後者は自活できる知を授けようとしている。

知と道徳による自立，すなわち，教育と啓蒙による自立は確かに必要不可欠であろう。だが，そのための具体的な提案はこれ以降この作品では全く言及されていない。貧困と無権利が歴史的にプロレタリアート個人の責任ではなく，都市化と資本の肥大化に基く社会的，制度的問題ゆえに，プロレタリアート個人へ道徳と知の勧めを説いても，それを具体的な場で教育として実施できる制度をいかに実現するかという視点は彼女はもたない。これは社会の汚点はプロレタリアートの「怠惰」にあるという視座に由来すると思われる。よって，怠惰の代わりに知と道徳による勤勉が対置される。怠惰を払拭し，清潔にするものは，個々人への説教となる。社会・制度的提言を行えば，必ず資本との軋轢をうんだであろう。こうした史的・社会的視点の欠如からくるプロレタリアート個人への責任転嫁論が彼女の思想の中にあり，それゆえ，制度的に彼らへの具体的教育方法を展開できなかったことは彼女の一つの限界を示していると思われる。

4　おわりに ── 「人間」観の変革

しかし，私は，このことをもって彼女の作品の価値を減じ，彼女は歴史的には使命をすでに終えたと断定されるブルジョア婦人運動論者の一人であったとして片づける論には与しない。その理由は，第一に女性史においては上流階級の自立は，下層階級のそれへも影響を与えてきたからである。第二に上流も，下層も，階級，階層の観点からは互いに異ってはいるが，共通する面，すなわち，男＝理性，女＝感情という図式を破ることによる男女としての平等を求める意識は，階級とは相関関係にありつつも，別のファクターであるからである。すなわち，女性史は賃労働 ── 資本の関係における階級視点と，男性による女性の抑圧という視点 ── 互いに関係しあう二重の，複眼視点をもつ必要がある。ルイーゼ・オットー・ペータースのこの第二章での提案は階級視点は確かに弱いが，性差別視点は貫徹している。そしてこの立場は，現在の文学研究においても必要不可欠である。70年代のラディカル・フェミニズムは，この視点の存在の重要性を運動・理論の双方にわたって示した。17世紀に「ペンもヒゲも男のものだ」として詩作を女性から奪ったヨアヒム・ラッヒェル。「才をみがくなかれ」と理と知を奪い，サーカスの駄馬の調教を女性にも行うべきだと説いたエドゥアルト・フックス。女子教育とは，より高い人間性をめざすものではなく，すべて男性のためにあるべきだと主張したルソー。意識的な女性たちの意見や判断を嫌ったゲーテ，そして，女性＝家庭，男性＝職業を詩にうたったシラー。彼らにとっていずれも「人間」とは男子のみであった。男性が作品を書き，受容するのは女性 ── という規範の下では，女子教育が求められたものは男性の作品を読む能力と男性との会話の中で潤活油になる資質でしかなかった。作品の創造と，これを通しての職業とし

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ての自立を，古典主義の「人間」観は許容しない。古典主義を讃美する次のような評価，「人間性の究極的勝利への健全な信仰」こそが再検討されねばならない。人間の中に男子のみしか含まない「人間」観を洗い直し，その上で再評価をすべきだと私は思う。時代に先んじて，ルイーゼ・オットー・ペータースは，彼女に先立つ古典主義の規範に異を唱えていた。彼女を含めた三月前期の女性作家の作品をとりあげ，それを手がかりとしてドイツ文学における「人間」観を再考すべきである。存在の痕跡すら消され，闇に葬られた無数の作品のかすかな光を通して，ドイツ文学全体は逆照射されねばならない。

注

(1)〜(4) Otto-Peters, Luise : Die Theilnahme der weiblichen Welt am Staatsleben. Amnestierte der Zeit. Hrsg. von Robert Blum. Eine neue Ausgabe des gleich nach dem Erscheinen Konfiszierten und jetzt freigegebenen Volkstaschenbuches Vorwärz. 5 . Jg. Leipzig 1847. S. 38

(5) Menschik, Jutta : Gleichberechtigung oder Emanzipation ? Fischer Taschenbuch Verlag 1978 S. 48

(6) Otto-Peters, Luise : Die Theilnahme der weiblichen Welt am Staatsleben. S. 39

(7)(8) Ebd. S. 40

(9)(10) Ebd. S. 41

(11) Ebd. S. 63

(12)〜(14) Ebd. S. 42

(15)〜(18) Ebd. S. 46

(16) Ebd. S. 47

(20) Ebd. S. 48

(21)〜(25) Ebd. S. 49

(26)〜(29) Ebd. S. 50

(30) Möhrmann, Renate : Frauenemanzipation im deutschen Vormärz, Texte und Dokumente, Philipp Reclam Jun., Stuttgart, 1978, S. 226

(31) Ebd. S. 71

(32) Ebd. S. 73

(33) Ebd. S. 77

(34) Ebd. S. 82

(35)(36) Otto-Peters, Luise : Die Theilnahme der weiblichen Welt am Staatsleben S. 51

(37)〜(40) Ebd. S. 52

(41)〜(49) Ebd. S. 53

(50) Ebd. S. 57

(51)(52) Ebd. S. 56

(53) Ebd. S. 57

(54) 良知力『向う岸からの世界史』未来社 1980, p. 98

(55) 同上 p. 109

(56) Otto-Peters, Luise : Die Theilnahme der weiblichen Welt am Staatsleben S. 59

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

Die Veränderung des Beriffs des "Menschen" in der deutschen Literatur

—— Im Fall von Luise Otto-Peters

Mitsuaki Tamura

(1)

Im Herbst 1843 stand in den „Sächsischen Vaterlandsblättern" ein Artikel von Robert Blum : Die Theilnahme der weiblichen Welt am Staatsleben. Luise Otto-Peters hielt ihn für „einen bisher noch nie ähnlich angelegten Stoff". Aufgrund ihrer Begeisterung brachte sie 1846 ihre Meinung mit demselben Titel vor die Öffentlishckeit.

Man kann ihre Arbeit in vier Hauptteile einteilen : Einleitung, erstes Kapitel, zweites Kapitel und Nachwort. In der Einleitung wird zuerst beschrieben, wie schwer ein Mädchen damals öffentlich seine Gedanken zum Ausdruck bringen kann. Dann ist von der Ungleichheit zwischen Männern und Frauen im politischen Leben die Rede. Es ist unsittlich, wenn die „Theilnahme der Frauen am Staatsleben unterbleibt". Die Einleitung behandelt schließlich positive Echos, die Luise Otto-Peters bei den Leserinnen fand, die andere Artikel von Luise in den „Sächsischen Vaterlandsblättern" gelesen hatten. „So sah ich mich plötzlich mit meinen Ansichten keineswegs allein stehen, wie ich gefürchtet hatte." Ihre Arbeit stützt sich auf den Widerhall der unbekannten, vielen Leserinnen.

(2)

Innerhalb des ersten Hauptteils werden nach ihrer Aussage zwei Themen unterschieden. Das erste ist durch die zunehmende Teilnahme der Frauen am politischen Leben bestimmt, wie zum Beispiel

(1) „das zahlreiche Erscheinen der Frauen bei den Kammerverhandlungen in Sachsen"
(2) die Gründung der vielen Frauenvereine
(3) „die weiblichen Unterschriften bei der Adresse an Schleswig-Holstein aus Baden"
(4) die Teilnahme der Frauen am politischen Fest in Sachsen und Leipzig
(5) das Interesse der Schriftstellerinnen für die religiösen und gesellschaftlichen Fragen

Warum hat die Zeit dieses Interesse bei den Frauen erweckt ? Darauf antwortet das zweite Thema. Luise sieht den Grund dazu darin, daß "der freie deutsche Geist" aufgewacht ist, der seit dem Ende des Kampfes gegen Napoleon schlummernd blieb. Was dann ihn denn aufgeweckt hatte, das wird mit drei Faktoren beantwortet :

(1) Die politische Poesie Georg Herweghs und Ferdinand Freiligraths werde von vielen Frauen gelesen.

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(2) Dank des deutschen Katholizismus verbreite sich gerade die neue Reformation. Bei dieser neuen religiösen Bewegung handle es sich um die Emanzipation der Religion von der Kirche. „Mit dem deutschen Katholizismus war die Losung gegeben einer allgemeinen geistigen Gleicheit vor Gott, vor Priestern wie Laien, Gelehrten und Unwissenden, Männern und Frauen."

(3) Viele Frauen begännen Romane zu schreiben, die sich mit den gesellschaftlichen Problemen beschäftigten. Der Drang nach gestiger Tätigkeit, nach einem größeren als dem häuslichen Wirkungskreis erwache.

Das zweite Kapitel besteht aus drei Teilen. Im ersten Teil machte sie darauf aufmerksam, daß der Geist zwar überall aufgeweckt sei, aber daß die deutschen Frauen immer unter der Aufsicht zu Haus bei ihren Eltern stünde. sie wagten keine Ansichten zu haben, als die in der Familie herrschenden. „Sie urteilen im Geist ihrer Eltern und ihres Mannes" Sie werden meistens zu Puppen erzogen, die sich auf die Suche nach den Käufern auf dem Markt konzentrieren. Aus dieser Unselbständigkeit und Charakterlosigkeit schließt sie im zweiten Teil, daß es den Frauen an geistiger, allgemeiner und totaler Erziehung fehle. Der Unterricht sollte auf „das Allgemeine, Höhere, das Ganze zielen. Basierend auf diesen Gesichtspunkten machte sie im letzten Teil drei konkrete Vorschläge :

(1) Man lehre in den Töchterschulen die Weltgeschichte, nicht als ein totes Lexikon mit systematischer Aufzählung von Herrschern, Schlachten und Jahreszahlen, sondern als ein lebendiges organisches Ganze.

(2) Privat- und Sonntagsschule sollten auf Initiative des Bürgers einrichtet werden.

(3) Nicht nur „die höheren und bemittelten Stände, sondern auch die unteren" sollten in diesen Schulen ihre Töchter erziehen lassen können.

(3)

Die altbekannte Streitfrage wird heute noch wiederholt gestellt : Sind Frauen anders als Männer, was vor allem grundlegende Fähigkeiten betrifft ? Die meisten Antworten darauf sind in Anbetracht des Feminismus heute in drei Gruppen einzuordnen :

(1) Frauen können weniger.

(2) Frauen können soviel wie Männer.

(3) Frauen können manches besser als Männer.

Die erste Antwort bezieht sich auf die Unterlegenheit der Frauen, die zweite auf ihre Gleichheit, die dritte auf weibliches Arbeitsvermögen. Die Stellungnahme der Männer zur Frauenfrage bestanden bis zur Klassik auf der ersten Antwort, mit Ausnahme von wenigen liberalen Männern wie Theodor Gottlieb von Hippel (1741～1796). Mit der Popularisierung der Werke Rousseaus, von seiner Bestimmung, wie die Frau sein soll, bildete sich das Muster „der Mann im Beruf, die Frau in Haus und Familie" noch stärker aus. Rousseau formulierte in „Emile" die Rolle des Mädchens :

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

„Die Erziehung der Frauen sollte sich immer auf den Mann beziehen, zu gefallen, für uns nützlich zu sein, uns zu lieben und unser Leben leicht und angenehm zu machen : das sind die Pflichten der Frau zu allen Zeiten, und das sollte sie in ihrer Kindheit gelehrt werden." Seine Epigonen in der Erziehungswelt traten oft mit der deutschen, kosmetischen Variante auf, die vor allem die häuslichen Pflichten betonten.

Goethe fühlte Widerwillen gegen die wachsende Spezialliteratur für Frauen und Kinder. Er schrieb in einem Xenion über seine Unzufriedenheit : „Immer für Frauen und Kinder ! Ich dächte, man schriebe für Männer. Und überließe dem Mann Sorge für Frau und für Kind."

Aus dem Schema „der die Frau versorgende Mann, die von dem Mann versorgte Frau" wurde eine gesellschaftliche Norm. Wenn Frauen wie Luise Otto-Peters oder Louise Aston selbständig den gesellschaftlichen Rahmen der geschlechtspezifischen Rollenverteilung sprengen wollten, dann wurden sie immer als „nicht weiblich" bezeichnet und die Rezeption der Literatur von Frauen für Frauen auch von den Männern abgelehnt.

Schiller bestand genauso wie Goethe auf der traditionellen Rollenverteilung. In „dem Lied von der Glocke" zwängte er Männer und Frauen in Rollen : Der Mann „stürzt sich wagend ins Leben", „Und drinnen waltet die züchtige Hausfrau." „Männer richten nach Gründen, des Weibes Urteil ist seine Liebe."

Rousseau bemühte sich in seiner Gesellschaft damals um die Realisierung von Freiheit, Gleichheit und Unabhängigkeit, die die uralte Gesellschaft einmal genossen hatte. Aber seine Bestrebungen zur Verwirklichung der neuen Gesellschaft begrenzten sich nur auf den Mann, dehnten sich nicht auf den Menschen. Die Erziehung der Männer sollte sich immer auf den Mann selbst beziehen, aber die der Frauen „auf den Mann". Man sollte die Männer selbständig erziehen, jedoch die Frauen abhängig. Es ist heute in der Erziehungswissenschaft allgemein anerkannt, daß „Emile ein Manifest des Menschenrechts" für die Kinder sei. Aber aus dem Begriff dieses „Menshen" sind die Frauen ausgeschlossen. In dieser Arbeit versuche ich den Begriff des „Menschen" sowohl bei Rousseau als auch bei Goethe und Schiller zu überprüfen. Ich bin der Ansicht, daß wir bei der wissenschaftlichen Forschung nicht von der sogenannten „weiblichen" Natur oder von der „echten Weiblichkeit" ausgehen sollten, sondern vom Gesichtspunkt der Gleichheit der beiden Geschlechter.

NII-Electronic Library Service